 論 文

マリ農村における子どもと女性による 共同労働組織 —その変遷と経済活動の比較—

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 今中亮介

マリ南西部の農村では、1990年代後半以降、「トン」と呼ばれる共同労働組織が急増している。この背景には、経済自由化などの理由から村内の現金流通量が増加したことがある。トンは植民地期以前からみられたが、近年増加している組織は子どもと既婚女性がそれぞれ新たに組織化したものである。本論では、一農村を事例にトンの歴史的な変遷を示した後に、子どものトンの経済活動の特徴を既婚女性のトンとの比較から明らかにする。両組織の経済活動は、「現金を対価として共同労働を行い、組織としてそれを貯蓄し、宴で消費する」という共通点がみられるものの、異なる論理に基づいて営まれている。既婚女性のトンが生活上の必要を満たすために営まれているのに対し、子どものトンは活動それ自体を楽しむこと、そのみに目的性をみいだしう。こうした目的性の違いは、一方が固定的であり他方が流動的であるメンバーシップをもつ組織構成の違いにも表れている。トンがもとより有していた両義性と分化への性向、個人を構成単位とする組織のあり方が、両組織が同じ「トン」でありながらこうした対照的ともいえる特徴をもつことを可能にしたと考えられる。

はじめに

アフリカの農村研究において共同労働は重要な主題の一つである。1980年代以降の共同労働に関する議論は、市場経済化との関連で共同労働がどのように変化しているのか、またしばしば農村内の階層化を促す賃金労働とどのような関係にあるのか、について注目するものであった(Englund, 1999; Kevane, 1994; McAllister, 2004; Saul, 1983; Worby, 1995)。伝統的な共同労働の衰退と個人主義的な賃金労働の増加がいわれる一方で(Swindell, 1985)、そうした単線的な移行は普遍的ではなく、社会的ネットワークへの投資等の理由から共同労働などの非

市場的な制度も残り続けることがいわれている(Berry, 1993)。さらに、共同労働は純粹に「非市場的」であり続けるわけではなく、内部に市場の要素を取り込むことで互酬性や平等性などの先在する規範と市場原理が拮抗するという主張もある(Geschiere, 1995)。共同性や互酬性といった極と個人性や競争性といった極を想定すると、市場経済の進展は共同労働を前者から後者の方へ変質させたり、後者の極に位置づけられる賃金労働へ移行させたりする傾向があるといえるが、変化のあり方は地域により一様ではない。

マリ南部に居住するマンデ系農耕民であるマリンケとバンバラの社会では¹⁾、「トン ton」と呼ばれる共同労働組織がみられる。マリ南西部に位置する「ニジェール河上流域(Haute Vallée du Niger)」(筆者の調査村も含む)のマリンケ社会において1960年に広域調査を行ったレイノールによると、トンの成員の年齢幅は約15～40歳、平均年齢は約20～25歳であり、全成員の70%を30歳

2013年10月4日受付, 2014年1月24日受理
連絡先: 〒606-8501 京都府京都市左京区吉田下阿達町46
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
e-mail: imanaka2@gmail.com

以下の成員が占めていた (Leynaud, 1966: 52; Leynaud et Cisse, 1978: 320, 322)。また、成員の男女比は男性が75%, 女性が25%であった。トンは、割礼を契機に結成される年齢組とリネージに基づく地区によって組織されており、組織は割礼をともした同輩意識から平等主義的であった (Leynaud et Cisse, 1978: 321)。活動は厳格な規則と規律に基づいて営まれており、共同労働を欠席したりその最中に熱意を欠いたりする場合、成員は等しく罰金や除名により罰せられた (Leynaud, 1966: 56)。レイノーらが調査を行った1960年代前半の時点ですでに共同労働の対価は現金で支払われており、その点だけを見ると「集団的な賃金労働」であったといえる。しかし、賃金はその都度個人に支払われるのではなく、組織として貯蓄され、そのほとんどが乾季の終わりに開かれる宴において消費されていた (Leynaud et Cisse, 1978: 324-331)。こうした共同労働のあり方は、「労働交換」と「祝宴的な労働」という古典的な2分法に収まらず²⁾、賃金労働とも厳密には区別できないという点で、特殊なものであった。

マリ中南部に位置するセゲー地方のバンバラ社会において調査を行ったLewis (1986)によると、トンは「リネージの生産様式」と対置される「協同労働様式」として組織されていた³⁾。男性の若者により組織されるトンは⁴⁾、年長男性の支配する垂直的なリネージの系譜を横に貫くような年齢組の水平的なつながりに基づいており、両者は緊張関係にあった (Lewis, 1986: 65)。どのコンパウンドの家長もトンの共同労働へ向かう若者を止めることはできなかったのである (Lewis, 1978: 47)。Lewis (1986)は、この両者の力の均衡が、若者による賃金労働の機会を求めての村外への移住という農村共同体を崩壊させる脅威に対して有効に作用していたという。ルイスの分析は、移民の増加という社会経済変化を視野に入れたものであるが、農村共同体の維持を志向した分析であり、若者自身にとってではなく農村全体にとってのトンの意義を論じることに主眼がある。従って、若者が家族内労働から離れて自律的に運営しているトンの実践上の論理やその変化については論じられていない。

本論では、このような特徴をもつトンが市場経済化を背景として1990年代後半以降に急増しており、その担い手が子ども⁵⁾と既婚女性とに変化していることを示す。その上で、子どもと既婚女性によるトンの間にはどのような違いが生じており、その要因は何なのか、また組織構成や経済活動はどのように変化しているのかについて考察したい。女性が主導する共同労働については、豊富な一次資料の分析に基づいた詳細な研究の蓄積がすでにある (近藤, 2011; Shiraishi, 2006; 末原, 1990)。そ

のため、本論ではこれらの研究が行われた地域や時代においてもおそらくみられなかったであろう「子どもによる共同労働」という新たな現象の分析に力点をおき、女性のものと比較したい。その際、労働を依頼する大人の側ではなく、組織を運営している子どもの側から検討を行いたい。

なお、先に挙げた先行研究では、地区と並んで年齢組がトンの組織化の基準とされていた。しかし、年齢組は近年、都市化やイスラーム化、若者の無関心などから衰退の傾向にあり (Steiner, 2011: 134)、筆者の調査村でも1982年以来新たに結成されていない。そのため、年齢組はもはやトンの組織化の基準ではなくなっている。現在のトンの組織化の基準は、地区を含めた「地縁」と「年齢」であるといえる。この点については次節で詳しく述べる。

以下では、第1節で調査村と子ども・女性のトンについて概説する。第2節では調査村におけるトンの変遷について示す。第3節～第5節では、共同労働、罰金と除名、宴の3つの側面から経済活動を全体的に検討する。最後に、それまでの議論をまとめて考察を行う。

1. 調査地とトンの概要

1.1. 調査地

調査地はマリ共和国クリコロ州のK村である (図1)⁶⁾。マリの首都バマコより南西約100 km、ニジェール河から約2 kmに位置する。K村の人口は約2000人で、そのおよそ9割がマリンケの人びとで占められている。イネ、ソルガム、トウモロコシ、ラッカセイなどの栽培を行う農耕を主として、牧畜や漁撈などの生業を複合的に営んでいる。乾季には金鉱やバマコへ出稼ぎに行く者も多い。K村の公立の小学校は1974年に、中学校は2003年に設置され、現在では村内の多くの子どもの通っている。また、村内には4つのコーラン学校もある。

親族形態は父系制で一夫多妻婚の夫方居住である。食事などの日常的な消費単位は、父系の2～3世代がまとまった「グワ gwa (かまど)」である。居住単位「ル lu (家)」は、グワが1～3個がまとまったコンパウンドを指す。数個のルがまとまって同一のクラン名 *jamu* をもつ父系リネージ「ボンダ *bonda*」を形成している。生産単位は、ラッカセイや菜園 *nako* のように多くが個人のものから、ソルガムやトウモロコシのように多くがグワのもの、それからイネのように多くがルのものまで様々である。田畑をもたない子どもはこれらの生産単位のそれぞれに労働を提供する (cf. Becker, 1996)。また、子どもは母親が個人的に営むラッカセイ畑や母方の親族の田畑で働く

図 1. 調査地

出所：筆者作成。以下の図表も同様。

表 1. K 村のトン (2010 年)

名称	組織数	成員の属性	活動
子どものトン <i>denmisen ton</i>	49	未婚男女	共同労働, 集会, サッカー, 宴
女性のトン <i>muso ton</i>	12	既婚女性	共同労働, 集会, 少額融資, 宴
支援のトン <i>tegelni ton</i>	6	既婚女性	頼母子, 少額融資, 集会
製粉機のトン <i>machine ton</i>	2	既婚女性	製粉機の運営
狩人結社 <i>donso ton</i>	1	既婚男性	見回り, もめごとの処理

こともある。本論ではこれらの親族に基づく各生産単位をまとめて「家族」と便宜的に定義し、そこでの労働を「家族内労働」、トンの共同労働や個人雇いの賃金労働などのように親族外から提供される労働を「家族外労働」とする⁷⁾。

1.2. 子どものトンと女性のトン

表 1 は K 村のトンを示している。調査地周辺においては 2 つの意味で「トン」が用いられている。広義には狩人結社や頼母子講、ローカル NGO などを含むヴォランタリー・アソシエーションを指すが (Jansen, 2008: 259), 狭義には植民地期以前からある共同労働組織を指

す。K 村において狭義のトンといえるのは「子どものトン *denmisen ton*」と「女性のトン *muso ton*」だけで、残りは広義のトンであるといえる。ただし、次節において検討するように、これら 2 つの狭義のトンも植民地期以前のトンがそのまま残ったものではなく、かつてのトンをモデルとして新しくできあがった組織である。

子どものトンと女性のトンの入退会はともに任意であるものの、組織構成をみると結果的には「地縁」と「年齢」に基づいて組織化されているといえる。村内に 49 個ある子どものトンには、多くの場合キョウダイや友人関係を頼って入会する。近所にキョウダイや友人がいる場合が多いので、結果的に同じ地区 *kinda* の者が集まること

が多いが、地区を超えて入会することもできる。年齢のそれほど離れていない者同士により組織は構成され、1組織につきおよそ5～10歳の年齢幅がみられる。従って、例えば5歳の者は平均年齢10歳の組織に入ることはあっても25歳の組織に入ることはない。組織間の移動は頻繁にみられ、2～5組織ほどかけもちする者もいる。村内に12個ある女性のトンは、近隣関係にある数個の「ル」の既婚女性（高齢者を除く）により組織される。地縁と並ぶ組織化の基準である「年齢」は、生物学的なものというよりも未婚／既婚という社会的なものであり、通常初婚を機に入会する。新たに他村や村内の他所から婚入してくる者を除いて入会者はおらず、かけもちをする者もいないのでメンバーシップは1年を通じて変動せず固定的である。

表2は子どものトンの地区、平均年齢、人数、報酬額を示している。調査を行うことができた43組織の員数は、最少で7人、最多で89人であり、平均人数は22人である。そのうちの35組織の総人数における男女の割合は、男性が69%、女性が31%である。女性の割合が極端に少ないのは、家事や育児などの家族内労働に従事することで女性の方が自由になる時間が少ないことや、初婚年齢が男性よりも10歳ほど早く、早い者では10代なかばから結婚をすることによる。村外へ婚出しない者でも結婚を機に子どものトン退会し、女性のトンに入会することが多い。男性も多くの方が初婚の前後に子どものトン退会している。そのため、既婚女性からなる「女性のトン」との対比から「子どものトン」は未婚の男女によるトンと便宜的に定義することができる。

子どものトンには、「長（ニエモゴ）*nyemogo*」と「書記（リシ）*liste*」,「ガルディ *gardi*」と「ガルディコントロール *gardi contre*」と呼ばれる役職がある。これらはまとめて「幹部（ニエモゴ）*nyemogo*」と呼ばれる。このように「ニエモゴ *nyemogo*」は、「長」と「幹部」という2つの意味で用いられる。幹部の仕事は成員たちをまとめて組織の運営を先導することである。長には具体的な仕事は割り振られておらず、組織の長として象徴的な役割を担う。書記は成員の名前や罰金額、共同労働の依頼者などが書かれたノートを管理する。ガルディとガルディコントロールは集会において議長役を担う。女性のトンには「長」がいるだけで他の役職はない。

子どものトンの活動は、3節と5節で検討する共同労働と宴のほかに集会和サッカーがある。集会は週2回決まった曜日の夕食後の20時頃に開かれ、活動の内容など様々な話題が話される。サッカーは組織ごとの練習に加えて同世代の組織どうして試合を行う。男性だけで行うことがほとんどで、女性は応援にくことはあっても

参加することは稀である。女性のトンの活動は、共同労働と宴のほかに5節で検討する少額融資がある。

2. トンの変遷

以下では、年配者からの聞き取りからK村のトンの変遷について記述する。1950年以前、K村にはトンが1つしかなかった。成員は性別を問わず15歳くらいから60歳以上の者までいた。年長者は働かず、若者を指導するような立場にあった。除草や収穫などの農作業を行う共同労働は現金や家畜を対価として行われていたが、成員が病気のときは無償で行うなど、組織は相互扶助的な側面もあった。一方で、共同労働や集会に遅刻・欠席した場合には木の棒で叩かれるか、現金もしくはコーラナツで罰金が科されるなど厳格な側面もあった。イスラーム犠牲祭（タバスキ）の頃に1週間ほど開かれた宴では、貯めた資金を元手に家畜や牛乳などを購入して米とともに消費した。グリオが演奏する音楽に合わせて午後から翌朝まで踊り続け、演劇をすることもあった。宴には子供や成員外の者も参加できた。

先行研究によると、トンは年齢組を単位に組織されていたとされるが、K村ではそのような事実は聞かれなかった⁸⁾。しかし、トンは村内の各リネージュを横断する形で組織されており、Lewis (1986) が指摘するようにリネージュとは異なる労働生産様式を有していたといえる。

1950年代に入ってK村のトンは2つの地区に分裂した。当時、K村には2つの地区があった。1つ目の地区はジェリラと呼ばれ、ジャバテなどのグリオ *jeli* のクラン名 *jamu* をもつリネージュを中心として構成されていた。K村の先住者である「土地の主 *dugukolotigi*」のコナテ・リネージュもここに含まれている。2つ目の地区はモリラと呼ばれ、イスラーム職能者 *mori* で自由民であるアイダラ・クランのリネージュを中心として構成されていた⁹⁾。この2つの地区の多数派クランであるジャバテとアイダラは、K村から7 km離れたA町をかつて支配していたケイター族のグリオと聖職者であったが、ケイター族が1909年に仏軍により流刑されたためにK村に移住したとされる (Jansen, 1998: 273-274)¹⁰⁾。他のマンデ系諸社会と同じくマリンケには自由民／特殊職能民／奴隷による三階層の身分制がみられたが、アイダラとジャバテは自由民と特殊職能民でありながら直接的な主従関係にはなかったのである。そうした背景もあって、両地区の仲違いからトンは2つに分裂したのであった¹¹⁾。2つに分裂した後も両者は緊張関係にあった。67歳のアイダラ姓の女性によると、モリラのある男性は、自地区の女性がジェリラのトンに入会したことに腹を立て、その女性

表 2. 子どものトンの平均年齢と報酬額 (2010 年)

組織名	地区	平均年齢	人数			報酬額 (F)			
			男性	女性	合計	前金	現金	給代	合計
ベンカン	モリラ	5~9	14	0	14	0	250	0	250
アルセナル	トゥーレラ	5~9	20	0	20	0	500	0	500
フロリダ	モリラ	5~9	n.d.	n.d.	11	0	500	250	750
M・アイダラトン	サダナ	5~9	12	9	21	50	500	250	800
バンジャントン	ジェリラ	5~9	15	0	15	50	750	0	800
ネマトン	トゥーレラ	5~9	0	10	10	50	750	0	800
シソコロ	サダナ	5~9	9	0	9	0	750	250	1000
ナストン	ジェリラ	5~9	n.d.	n.d.	20	50	700	250	1000
サバリトン	ジェリラ	5~9	n.d.	n.d.	20	50	750	250	1050
ピントウラトン	ジェリラ	5~9	9	9	18	50	1000	0	1050
シュペルリオン	トゥーレラ	5~9	n.d.	n.d.	n.d.	50	750	250	1050
ゴニンバラ	モリラ	5~9	n.d.	n.d.	23	0	1000	250	1250
ダカン	モリラ	5~9	n.d.	n.d.	24	0	1000	250	1250
タトゥヌン	サダナ	5~9	20	10	30	50	1000	250	1300
アワトン	ジェリラ	5~9	12	13	25	50	1000	250	1300
ジュベボン	モリラ	5~9	17	15	32	100	1000	250	1350
パニトン	モリラ	10~14	0	13	13	50	1000	0	1050
シャンピオン	ジェリラ	10~14	n.d.	n.d.	21	0	1250	0	1250
ノキアボイ	トゥーレラ	10~14	12	0	12	0	1250	0	1250
S・クヤテトン	ジェリラ	10~14	0	12	12	50	1000	250	1300
ピントウトン	ジェリラ	10~14	24	6	30	50	1000	250	1300
N・トラオレトン	トゥーレラ	10~14	0	15	15	100	1000	250	1350
ランバトン	ジェリラ	10~14	n.d.	n.d.	n.d.	0	1250	250	1500
ケルディリオン	トゥーレラ	10~14	16	10	26	50	1250	250	1550
ゲレンデスーフェ	サダナ	10~14	0	10	10	0	1500	250	1750
K.PJ	トゥーレラ	10~14	n.d.	n.d.	22	0	1500	250	1750
ケラバラトン	ジェリラ	10~14	20	10	30	50	1500	250	1800
トラマガン	ジェリラ	10~14	20	0	20	50	1500	250	1800
ジョリンボイ	モリラ	10~14	15	6	21	100	1500	250	1850
マルマン	トゥーレラ	15~19	0	15	15	100	1000	250	1350
J.PS	ジェリラ	15~19	10	2	12	0	1500	250	1750
ラマカ	トゥーレラ	15~19	12	1	13	0	1500	250	1750
ムサパニ	ジェリラ	15~19	20	10	30	50	1500	250	1800
サダム	トゥーレラ	15~19	n.d.	n.d.	n.d.	100	1500	250	1850
ブレウルージュ	トゥーレラ	15~19	10	0	10	50	1500	500	2050
モガンモガントン	ジェリラ	15~19	n.d.	n.d.	20	100	1500	500	2100
S・アイダラトン	トゥーレラ	15~19	0	18	18	0	2000	250	2250
ビウォロウォロトン	ジェリラ	15~19	n.d.	n.d.	15	100	2000	250	2350
サダナトンバ	サダナ	15~19	52	0	52	100	2500	500	3100
アラスミス	トゥーレラ	20~24	7	0	7	100	1250	500	1850
F・フォファナトン	トゥーレラ	20~24	4	8	12	100	1500	250	1850
アッタンション	モリラ	20~24	15	5	20	100	2000	0	2100
ジェリラトンバ	ジェリラ	20~24	54	7	61	100	2500	500	3100
トゥーレラトンバ	トゥーレラ	20~24	70	19	89	100	2500	500	3100
モリラトンバ	モリラ	20~24	38	9	47	100	2500	500	3100
ソコベテ	ジェリラ	25~29	11	0	11	100	2000	250	2350

注：労働形態は2時間の労働を行うウロンジョン。給は1パックで250F。1ユーロ≒656F。

の肩を殴って骨折させた。トンの入退会は形式的には任意であったが、実際には地区への帰属が一定の強制力をもっていたのである。1950年代以降K村のトンは、村落全体の紐帯を生む場から他地区との競争的な関係を含んだ地区内部の紐帯を生む場となったといえる。1970年代には、サダナとトゥーレラという2つの地区が新たにでき、この2地区にもそれぞれトンができた。

1970年代にはまた、ジェリラで若者だけの小規模なトンが組織され始め、これが子どものトンないしゲレンと呼ばれるようになった。「ゲレン *grin*」は、都市部においてみられるお茶を飲み、おしゃべりをする友人どうしの集まりのことを指す (Meillassoux, 1968)。都市のゲレンでは各成員が「分担金 (cotisation)」を出し合って宴を開く。ジェリラの人びとは、グリオの仕事のために都市部に行く機会や現金を獲得する機会が多かった。そのため、ゲレンのような都市文化をいち早くトンに取り入れたのだろう。ゲレン的な要素は、「ラスト」や「ディスコ」などの都市の若者文化に影響を受けた組織名や、地区に関係なく友人関係を基に結成され、成員数の少ない組織構成においてみられる。しかし、活動は既存のトンと変わらなかった。友人どうしの日常的な集まりを軸にしつつも、集会や共同労働などの活動は厳格になされ、逸脱がみられると罰金が科された。宴の資金も、個人的に稼いだ現金を「分担金」として集めるのではなく、共同労働の報酬を組織として貯蓄したものであった。

「子どものトン＝ゲレン (以下、子どものトン)」は、1980年代を通じて他の地区にも広がっている¹²⁾。子どものトンの成員の多くは、(地区を代表する) トンも同時にかけもちしており、宴の際には子どものトンとトンの成員たちが互いに招待し合った。こうした交流を通じて子どものトンとトンの差異は曖昧になっていった。トンの組織化は、地区の年長者／年少者の縦の関係よりも若者どうしの横の関係に基づくようになり、年長者は次第にトンに残らなくなった。年長者になぜトンをやめたのかと尋ねると「興味を失ったからだ」と答える。トンへの帰属は個人的な興味によって決められるようになり、地区という個人を超えた共同体による強制力が働かなくなったといえる。加えて、それまで年長者がトンに属していた理由に家族外労働力の確保という必要性があったと考えられるが、3節で述べるように、そうした必要性は直接トンに属さずとも子どものトンへ外部から労働を依頼することで満たされるようになった。1970年代以降子どものトンが若者の嗜好に沿う形で組織されていく中で、その影響から既存のトンは地区への帰属よりも個人的な友人関係を基にしたより「私的な」場へと変化していったといえる。

1990年代後半以降、市場経済化を背景に子どものトンは急増した¹³⁾。K村の子どものトンは1994年には7個であったが、2010年には49個になった。また、組織数の増加と同時に低年齢化も進行した。1990年代前半以前には15歳未満の者はほとんど入会していなかったそうだが、2010年には46組織中29組織が平均年齢15歳未満である (表2)。

トンは現金を媒体として営まれるので、村内の現金流通量が増えなければ組織数の増加も見込めない。1992年の経済自由化以降マリは経済成長を遂げた。都市生活者は1994年のCFAフラン (以下F) 切り下げで購買力を失うなど打撃を被ったが (Soares, 2010: 243-244)¹⁴⁾、農村ではむしろ農産品輸出が増えたことで利益がでたとされる (三浦, 2009: 180)。マリでは、土地と労働の政府による管理は元々それほど強くなかったが、肥料・除草剤や農機具の流通は1990年代初期までODRs (Opérations de Développement Rural) を通じて政府に独占されていた (Koenig et al., 1998: 76-81)。独占が解かれ、それらの入手が容易になったことが生産量の増加につながったものと考えられる。こうした変化からK村の村人は、1990年代はゆるやかに、2000年代に入ると劇的に現金 (商品) 経済への依存度が高まっていることを実感している¹⁵⁾。そうした実感は、テレビやバイク、携帯電話などの奢侈品の購入、農業においては肥料や除草剤の購入やトンもしくは個人労働者の雇用の増加とともに語られる¹⁶⁾。

まだトンに入会していない3、4歳の子供が身近な年長者のトンの活動についていき、年長者を模倣して参加しようとする光景をよく目にする¹⁷⁾。以前も同様に子供はトンへの参入を試みていたと考えられるが、現金の欠如がこれを阻んでいた。近年になり、親などの身近な大人から少額ながら「小遣い *lajaliwari*」をもらうようになったこと、子供自身が小銭を稼ぐ仕事が増えたことが、15歳に満たない子供にもトンを組織するのを可能にした。このように、労働を依頼する大人と運営する子供の双方が以前より現金を多く持つようになったことが子どものトンの急増と低年齢化の背景にある¹⁸⁾。

トンから子どものトンへという流れとは別に、2000年代に入ってから既婚女性は彼女たちだけで「女性のトン」と呼ばれる組織を始めた。女性のトンは1950年代以前から続くトンと直接的な連続性をもっていないが、活動内容の面では類似性がみられ、組織化に際してかつてのトンを模倣したものと考えられる。子どものトンと同様に村内の現金流通量の増加が女性のトンの組織化を可能にしたといえるが、組織化の直接的な理由は、次節以降で検討するようにラッカセイ畑の経営などの生活上

図2. K村における農事暦と性別分業

注：トウモロコシの皮むきとラッカセイの殻とりは10歳以下の子どものみが行う。子どものトンの労働のうちこれらの労働内容のみ男女両方が作業を行う（他の労働内容においては作業自体は男性だけが行い、女性は水汲み等の補助を行う）。子どものトンのみが行う日干しレンガ作りは1～4月に実施される。女性のトンの宴は11～1月、子どものトンの宴は12～4月に開かれる。

の必要性にあるといえる。

3. 共同労働

3.1. 共同労働の概要

共同労働の対象となる畑の作物は、菜園で栽培される野菜や果樹を除く主作物のほとんどである（図2）。作業内容についても、畑の伐採・耕起から播種、除草、収穫、脱穀までほとんどの行程が対象となる。これらの農作業は基本的に家族内の労働力不足を補うためになされる。中でも除草と収穫は重労働で人手が必要なので多くのトンがかり出される。

トンの共同労働は畑主の依頼から始まる¹⁹⁾。畑主は依頼する際に組織ごとに定められた前金の支払いを現金で行う。成員は前金を支払った人の名前をノートに記入し、集会において他の成員に周知して労働日を定める。労働は前金を支払った人から順番に実施される。

共同労働は、2時間（14～16時）の労働を行う「ウロンジョン」と4～5時間の労働を行う「テレン」の2種類がある。後者の報酬は前者の約2倍である。共同労働の多くはウロンジョンであるが、トウモロコシ畑の除草やイネの刈り取りではテレンもみられる。テレンでは労働の合間や後に依頼者側から食事が振る舞われる。

子どものトンの共同労働は熱気に満ちており、競争的である。一列に隊列を組んで競うように歩を進め、鍬や鎌を素早く振り下ろしていく。叫び声を上げたり、激しく呼吸音をたてたりしあう。作業が遅い者は容赦なく罵

声を浴びせられ、嘲笑される。また、労働時間はかなり厳密で、開始時間が遅れるとその分同じだけ終了時間も延長される。依頼者が同行しており、成員が労働時間を守らない場合は忠告を行う。また、依頼者は参加人数が少ないことを理由にやり直しを迫ることもある。女性のトンの共同労働は和やかな雰囲気です、時間も大体3～4時間で、終わらなければ別の日に改めるなどこうした厳密さはない。

報酬は通常労働日の後2、3日以内に支払われる。依頼者に手持ちがない場合は支払いを待つこともあるが、その場合でもなるべく早く支払うことが期待され、成員は支払いが済むまで取り立てに行く。報酬はその都度各成員に配分されるのではなく、宴まで組織として貯蓄管理される。10代前半までの若い成員による組織では、周りの大人に資金の貯蓄・管理を任せる。女性のトンでは宴の直前まで報酬の支払いを待つ「ツケ払い」が基本である。

3.2. 報酬額の設定

共同労働の報酬は、①前金、②飴（もしくはタバコかお茶）、③現金からなる。報酬の額は、多くの場合共同労働を開始する雨季の始めに集会で話し合われ、決められる。報酬額は依頼者と交渉することもないので基本的に1年を通して変わらず、固定的である。

前金は50か100Fで46組織中32組織が取っている（表2）。飴は労働の実施日に受け取り、実施後に分ける。9組織を除いて受け取っている。労働の実施後に受け取る

表 3. 子どものトンの平均年齢と平均報酬額 (2010 年)

平均年齢	組織数	平均報酬額 (F)	1 人当たり報酬額の平均 (F)	個人労働の報酬額 (F)
25~29	1	2350	214	—
20~24	3	1933	174	約 300
15~19	8	1925	128	約 250
10~14	12	1500	78	約 200
5~9	15	963	53	約 125

注：表 2 中の 46 組織のうち人数不明の 3 組織と総人数と実働人数の差が大きいトンバの 4 組織を除く。1 ユーロ ≒ 656F。

表 4. 女性のトンの報酬額 (2010 年)

組織名	人数	報酬額 (F)	1 人当たり 報酬額 (F)
K	20	1750	88
N.K	20	2250	113
M.S	22	6000	273
J.M.K	24	1850	77
J.K	30	2100	70
N.T	30	2650	88
J	30	5250	175
S.F.K	30	7000	233
M.B	40	3750	94
S	45	3500	78
T.A	n.d.	3750	n.d.

注：報酬額はお茶代・給代を含む。1 ユーロ ≒ 656F。

現金は報酬の中心を占める。その額は 250F から 3100F までかなりの幅がある。報酬額は、成員の年齢が上がるほど増加している（表 3）。個人労働の報酬額においてもこれと同様の傾向がみられる。また、個人労働の報酬額はトンの 1 人当たりの報酬額よりも 2 倍ほど高い（表 3）。成員の総人数と実働人数に多少の差があることを差し引いても後者の方が高いといえるだろう。

一方、女性のトンの報酬額は組織によってばらばらである（表 4）。既婚女性であれば年齢が離れていても働きに大差はないので年齢差は報酬に影響しない。成員の人数が労働力を左右しうる唯一の基準といえるが、人数と報酬額の間にも相関がみられない。

子どものトンと女性のトンの報酬額にはなぜこのような違いがみられるのだろうか。表 5 は 2010 年 7～8 月における 1 か月間のケラバトン（以下 K トン）の労働の依頼内容を示している²⁰⁾。子どものトンでは多くの場合、成員が自ら労働を依頼することがないので、成員外の人びとが依頼者となる（表 5）。一方で、女性のトンの労働の依頼者は成員のみに限定されている。2010 年 6～7 月の 1 か月間に実施された女性のトン J.M.K の共同労働は、7 回とも全て成員本人からの依頼であった。労働内容は全てラッカセイの播種である。既婚女性は個人でラッカセイ畑を営んでおり、自身の畑の労働を所属するトンに依頼しているのである。女性のトンの労働内

容はイネの除草を除いては全てラッカセイ畑での作業である。このように共同労働の依頼が成員内に閉じていることから他の組織との競争が避けられている。また、男女混成の子どものトンでは農作業を行うのは男性であり、女性は水汲みや応援などの役割を担う。従って、女性のトンの労働の多くは性別分業により子どものトンと重複せず（図 2）、子どものトンとの競争も避けられている²¹⁾。このように二重に競争が避けられていることが、各組織それぞれ自由に報酬額を設定することを可能にしている。

子どものトンでは依頼者が成員外に開かれているので他の組織との間で報酬額の競争が生じうるといえる。それでは、実際に報酬額はどのようにして決められているのだろうか。

【事例 1：報酬額をめぐるやりとり (2011 年)】

K トンの成員は、翌日に控えた共同労働（イネの刈り取り）を前に報酬額をいくらにするか集会で話し合っていた。それまでに行っていた除草作業の報酬額は 2000F だったが、イネの刈り取りはそれよりも楽なので安くした方がよいのではないかという意見がでていた。成員 I（13 歳）が 2000F のままでいいと主張するのに対して、長である L（17 歳）は、高すぎる、同世代のトンの額（1500F）に合わせるべきだと、「K.P.J」と「ケルディリオン」という組織名を挙げながら主張した。結局、他の

表 5. ケラバラトンへの労働の依頼

実施日	依頼者	成員との親族関係	作業	畑の作物
2010.7.27	M・ドゥムヤ	なし	除草	ラッカセイ
2010.7.28	J・ジャバテ	L・コナテの母方祖父	除草	ソルガム
2010.7.29	S・クヤテ	なし	除草	ラッカセイ
2010.7.30	J・カミソコ	A・ジャバテの父方祖母	除草	ラッカセイ
2010.8.2	N・カミソコ	なし	除草	ラッカセイ
2010/8/n.d	L・ジャバテ	なし	除草	トウモロコシ
2010.8.22	ML・ドゥムヤ	SK・ジャバテの母	除草	ラッカセイ
2010.8.23	ML・ドゥムヤ	SK・ジャバテの母	除草	ラッカセイ
2010.8.24	N・トラオレ	L・コナテの父方オジの妻	除草	ラッカセイ
2010.8.25	S・ジャバテ	SH・ジャバテの父方祖父	除草	トウモロコシ
2010.8.28	J・ダンテ	SK・ジャバテの義母	除草	ラッカセイ

者も L に賛成して 1500F で落ち着いた。集会後、L と I にこのことについて尋ねるともう一度議論になった。I は、「K.P.J と俺たちは違う。K.P.J はお金を持っているが俺たちは持っていない。宴が迫っている。お金を探さなければならない」という。その後、筆者が「2000F にしたとしても S（翌日の労働の依頼者）は納得しないのではないかと尋ねると、L は「S は納得する。でも、それ（2000F にすること）はよくない」という。さらに、なぜかと問うと「神は偉大だからだ。それはよくない」と繰り返した。

この事例の要点は、2000F でも依頼者は納得するだろうという予測が立っているにもかかわらず、成員たちが自ら報酬額を減額して 1500F に設定した点にある。報酬額の設定の際に基準となったのは、依頼者である「買い手」側がどう思うかではなく、同世代の他のトン、つまり同じ「売り手」側の金額であった。L はいうまでもなく、「K.P.J と俺たちは違う」と述べた直後に K.P.J との資金総額の差について言及した I においても、同世代のトンと比較対象としている。K.P.J は度々サッカーの試合を行い、毎年のように宴に招待し合う、K トンのいわば競争相手である。この事例では、K.P.J に対する 2 つの競争的な態度がみられる。報酬額をなるべく高くして結果として資金総額で相手に追いつこうという I にみられる態度と、報酬額を合わせて同じ条件で競おうという L にみられる態度である。結果としては後者が勝利 1500F に落ち着いている。一方の依頼者の方も表 2 を眺めるように各組織の報酬額を俯瞰的に見渡して労働を依頼するトンを選べるわけではない。多くの大人は居住地に近い 2, 3 の組織しか知らず、中には自分の子が属しているトンさえ知らない親もいる。そうしたこともあり、依頼者は多少金額が高くとも文句をつけないことがほとんどである。

つまり、買い手と売り手が互いに私利私欲を迫及した

結果として「価格の自己調整」が起こっているのではなく、成員の側での競争が金額の抑制要因として働くことで、結果として年齢に応じた金額に落ち着いている。このようにして、報酬額は組織の境界を超えて全体として調整されているのである。報酬額は、毎年同じ年齢層の組織がおおよそ同じ金額になっているという意味で「慣習的」に決まっているともいえる。

報酬を現金で受け取るという共通点をもつ子どものトンと女性のトンの共同労働であるが、特徴の違いを次のようにまとめることができる。子どものトンの共同労働は田畑をもたない者たちが生産者に労働力を売る「賃金労働」の形に近い。ただし、報酬額は市場交換により決まるというよりも世代内の競争を背景として「慣習的」に決まっているといえる。一方で、女性のトンの共同労働は生産者自らが不足労働力を補い合う「労働交換」の形に近い。報酬の支払いは賃金を儲けることよりも、成員間の労働回数の不均衡を調整する意味合いが強い²²⁾。従って、報酬額は成員間の合意のみにより各組織自由に決められている。

女性のトンの共同労働は不足労働力の確保としてそれ自体にも経済的なインセンティブをみいだせる一方で、子どものトンにおいてそれはみいだせない。子どものトンの経済的なインセンティブは、貯蓄した労働報酬を一気に使い果たす宴に一極化しているといえる。

4. 罰金と除名

子どものトンの宴には全ての成員が参加できるわけではない。K トンの成員は、2011 年の 11 ～ 12 月の間に 47 人中 16 人が除名された。この期間だけで全成員の実に 3 分の 1 が除名されたことになる。除名された 16 人のうちの半数の 8 人は罰金の蓄積が理由で除名されている²³⁾。共同労働や集会の欠席ないし遅刻に対しては

罰金が科される。K トンの罰金額は、共同労働の欠席が250F、遅刻が125F、集会の欠席が50F、遅刻が25Fである。罰金は長などの幹部にも例外なく科され、成員の平等性が徹底されている。罰金がある程度まで溜まると支払いの期日が指定され、守られなければ除名される。罰金の蓄積が理由で除名された8人の除名時の罰金額は200Fから725Fまでと幅広く、平均は487.5Fである。

活動を重ねるごとに罰金は溜まる傾向にあるので、除名者は宴に近づくほど多くなる傾向にある。同様に、新成員の入会金も平常時には100Fほどだが宴が近づくとも高騰する。2012年の宴の直前にK トンに再入会したBf(13歳、女性)は1000Fの入会金を払った。一方で宴が終われば、前年度に除名された者でも簡単に再入会することができる。組織の境界は宴が近づくほど強固になっていき、宴が終わるともう一度軟化するのである。

除名者のうち13歳以上の3人は全て成員どうしの「けんか」が理由で除名されており、そのうち2人は結局和解して再入会している。「罰金の蓄積」が理由で除名された8人はいずれも12歳以下の年少者である。一般的に年少者は罰金の支払い能力が低いといえるが、年長者と同様に罰金が科されるので除名されやすい傾向にある。しばしば除名された年少者は自身よりも年少の者を呼んで新たに自分たちのトン組織する。成員間の条件の平等の徹底により結果として組織内の年少者が脆弱な立場にあることが組織の分化を促しているといえる。このことが子どものトンの増加と低年齢化の(組織)内部要因であると考えられる。

処罰の厳格さは変わらないにも関わらず、全成員の3分の1が除名されるような過剰な排除をもたらしている理由は、①処罰が現金による罰金だけになったこと、②除名時に代わりのトンに入会することが容易になったことによると考えられる。かつてはコーラナッツの支払いや鞭打ちにより罰金を帳消しにすることができたが、現在では現金以外に帳消しにする手段がなく、罰金が蓄積されやすくなった。また、かつては村内もしくは地区内に1つしかトンがなかった上に他地区のトンに入会することが難しかったため、組織からの退出は抑制されていた。しかし、現在では除名されたとしても他のトンに入会したり新たに発足したりすることが容易になり²⁴⁾、除名する側もされる側もかつてよりは除名を躊躇しなくなったものと考えられる。これらの理由から以前よりも過剰になっている組織からの排除は、労働の対価を全く得ることなく組織を去る者が相当数いることを示している。

一方で、女性のトンにおいても罰金はあるが、子どものトンと比べて遅刻者や欠席者が少ないこともあり、それほど溜まらない。溜まったとしても罰金の支払いは労

働報酬と同じく宴の直前まで「ツケ」として待ってもらえるので除名には至らない。

5. 宴

雨季から乾季の前半にかけて共同労働を休まず行い、罰金の支払いを滞りなく済ませた者だけが宴に参加することができる。宴以降、再び雨季が始まるまでしばらくは活動も不活発になる。従って、宴は子どものトンの活動のクライマックスであるといえる。

宴では共同労働で貯蓄したほぼ全ての資金を消費する²⁵⁾。表6は2012年のK トンの宴の際の資金使途を示している²⁶⁾。レンタルの音響機材を除いて全て飲食物であり、宴が終わった後に残るものは何もない。これらの材料でサンドイッチとスパゲッティ、砂糖入りのお茶を作る。K トンはこの年資金に余裕がなかったのも、サンドイッチとスパゲッティのメインの具をイワシの缶詰にしているが、余裕がある年はヤギを丸1頭購入してその肉を用いる。

一方女性のトンでは、少額融資など宴以外の資金使途もみられる。少額融資は1口5000Fで借りられ、3か月ごとに借りた額の10分の1の手数料が発生する。3、4口分借りる者が最も多い。宴で費やされる資金の多くはパーニュ(布)代に割かれている。パーニュを共同購入して1人ずつに配布後、各々が仕立てた衣服を着て宴で踊るのである。女性のトンJ.M.Kでは、ワックスのパーニュを1人につき3枚(1枚1×2メートル)3500F分を購入した。24人分で合計84000Fである²⁷⁾。その他の宴の費用は音響機材のレンタル代約10000Fとグリオの司会代3000F、お茶代約1500Fだけであった。普段には買えない奢侈品のパーニュを共同購入することで安く買うことができるし、仕立てた服は宴の後も個人のものとして残り、普段着などとしても使えるので合理的な資金運用であるといえる。

子どものトンの成員または成員外の者は宴にどのように参与し、購入した飲食物を分配・消費しているのだろうか。2012年3月9日に開かれたK トンの宴を事例に検討する。宴の主たる参加者は、K トンの成員たちに加えて、成員の個人的な友人が数名と招待状を出して招いた同世代の子どものトンである「K.P.J」と「ピントゥトン」と「ジョリンボー」の成員たちで、参加者は全部でおおよそ50～60人だった。

除名者や招かれていない者は会場に入ることができない。宴は野外の開けた場所で開かれる。円形の会場は筵で囲われており、入口は1か所しか開いていない。入口では成員の男性が細い木の棒を持って立っており、成員

表 6. K トンの宴における資金使途

購入日	購入場所	購入品目	量	値段 (F)
2012.3.6	A 町	スパゲッティ	3 カートン	19500
2012.3.6	A 町	ジュース (コーラとファンタオレンジ)	24 本	5000
2012.3.7	A 町	中国茶	10 個	700
2012.3.7	A 町	砂糖	1 kg	600
2012.3.7	A 町	トマトピューレ	1 缶	500
2012.3.7	A 町	調味料 (MAGGI)	60 個	1650
2012.3.7	A 町	ニンニク	0.5 kg	250
2012.3.7	A 町	トマト	40 個	250
2012.3.7	A 町	玉ねぎ	2 kg	500
2012.3.7	A 町	胡椒	1 小袋	250
2012.3.9	K 村	フランスパン (小)	50 個	2500
2012.3.9	K 村	ガソリン	6 リットル	5250
2012.3.9	K 村	砂糖	2 kg	1300
2012.3.9	K 村	中国茶	20 個	1200
2012.3.9	K 村	イワシの缶詰	10 缶	5000
2012.3.9	K 村	スピーカー (大) (レンタル)	1 セット	1000
2012.3.9	K 村	発電機、アンプ、スピーカー (小) (レンタル)	各 1 セット	5000
2012/3/9 (深夜)	K 村	中国茶	5 個	250
2012/3/9 (深夜)	K 村	砂糖	10 小袋	250
				合計: 50950

注: 1 ユーロ ≒ 656F。

やゲスト以外の者が入ろうとすると叩いて追い払う。大音量の音楽が村中に響き渡るので囲いの外には人だかりができるが、彼らは中には入れないので筵の隙間や木の上から中の様子を伺う。会場への出入りを禁止することは、かつてのトンや現在の女性のトンにおいてはみられない。かつてのトンは組織の属する共同体 (村や地区) の者であれば成員でなくとも宴に参加することができた。また、女性のトンでは食事を提供しないので「ただ食い」される心配はないし、揃いのバーニユを着て踊る姿を見られることが宴を盛り上げるために不可欠な要素なので会場は開放的である。

宴の進行は極めて単調である。3、4 回ほど食事が振る舞われるのを除いて、基本的にはステレオから流れる大音量の音楽に合わせて踊り続けるだけである。それ以外の時間はお茶を立てて飲みながらおしゃべりをする。しかし、かなりの大音量なので会話をするには耳打ちをしなければならず、おしゃべりも長くは続かない。

K トンの宴は 22 時ちょうどに始まり、翌朝の 7 時ちょうどに終了した。開始直後から音楽と踊りが続いた。一人没頭するように下を向いて素早いステップを刻み続ける者、ペアを組んで恥ずかしそうに互いの肩に触れ合う男女、4、5 人で円を組んで手拍子を叩きながら少しずつ回っていく者たち。1 曲が終わるたびにポーズを決めて椅子に戻っていく。そして、また好みの曲のイントロが流れると歓喜の声とともに立ち上がり踊りに入る。成

員たちはみな 1 年間の労を吹き飛ばすかのように踊り狂っていた。ゲストたちも同様に楽しんでいたが、どこか控えめに振る舞っているようにみえた。

深夜の 2 時を過ぎると少しずつ疲労の色が見え始め、だんだんと椅子から立ち上がらない者も出てきた。食事はそういう時分に図ったように提供される。食事が振る舞われたのは、2 時 14 分 (サンドイッチ)、3 時 15 分 (スパゲッティ)、6 時 23 分 (スパゲッティ) の 3 度である。1 回目と 2 回目の食事はゲストにも振る舞われたが、3 回目の食事と 6 時 12 分に配られたペットボトルのジュースは、ゲストが全員帰宅していたので成員だけに提供された。

食事は成員やゲスト以外にも「非公式に」分配された。1 回目の食事の際、罰金の蓄積が理由で除名されていた元成員の S (11 歳) と 10 歳以下の成員外の者たちにもたらい 1 つ分のスパゲッティが与えられた。囲いの外で隠れていた S たちにこっそりスパゲッティを持って行ったのは成員の O (13 歳) だった。これに激怒した成員の I (13 歳) と M (16 歳) は、「なぜ S に渡す? 食べさせるな」と囲いの外に飛び出したが、すでにほとんど食べ終えた S は逃げていた。この後、調理を担当する T (40 代女性、成員の母) 宅に筆者と一緒に向かった I は怒りが収まらず、「何で S にやったんだ!」と怒気を込めて言った。隣にいた成員の Mf (15 歳、女性) は、「(S にあげても) なくならないでしょ」と論じたが、I は聞く

耳を持たず怒っていた。Iの執拗な怒りには、フリーライダーは許さないという態度が表れているといえる。一方で、OやMfのように寛容さも同時にみられ、ここでは相反する態度を認めることができる。

最後には食べきれずに大量のスパゲッティが残った。6時30分頃からたらい1つ分のスパゲッティをメンバーたちが投げつけあい始めた。その様子ははち切れんばかりの笑顔でいかにも楽しそうだった。投げ合った後の残りをちょうどこの時間に起きてきた小さい子どもたちに長のLが振る舞った。子どもたちはたらいに飛びついてスパゲッティを奪い合っていた。7時に音楽が止まり、撤収作業が一段落着いた7時20分頃にT宅に行くと、たらい7つ分のスパゲッティがさらに残っていた。Tはメンバーが家から持ってきた小さなたらいにこれを分けた。メンバーたちはこれを「お土産 *sama*」として各々持って帰り、家族に振る舞った。

サンドイッチはメンバーとゲストのみで分けられたが、スパゲッティは全部でたらい17つ分あったうちの8つがメンバーやゲスト以外の者によって食べられ、1つは誰の口にも入らず投げ捨てられていた。実にその半分が組織の外へ出ていたことになる。宴において消費されるもう一つの「購入品」である音楽も囲いの外に漏れ出ており、外部の者まで楽しませていた。労働や支払いを怠る者を除名し、宴の場に入れないことによりフリーライダーは厳しく制限されるはずであったが、実際にはかなりの部分が組織外へ流出していたのである。

宴が開かれるまでの活動には、よく働き、稼ぐことで宴を盛大に行おうという目的性を認めることができる。こうした目的性は、労働を怠った者の宴への参加を除名により制限することにも現れている。しかし宴の場面場面では、①目的性（手段と目的の結びつき）に沿ってフリーライダーを制限する態度と、②手段を適切に共有したかどうかはもはや「どうでもよくなっている」態度の両方がみられ、結果的には後者の方が優勢となっている²⁸⁾。さらに、宴での消費が次の生産（労働）活動の拡大や再生産のためになされていないことは明らかであり、宴それ自体も目的性を有していないように見える²⁹⁾。このように、子どものトンの宴は時間的な持続から切り離され、目的性から逸脱した「蕩尽」の場であるといえるだろう。

おわりに

子どものトンと女性のトンの間には、「現金を対価に共同労働を行い、組織として貯蓄し、宴で消費する」、換言すると現金を媒体とした生産労働組織でありかつ消

費組織である、という共通点がみられるものの、それらは異なる論理に基づいて営まれていた。

女性のトンは、生産の面では個人畑経営のための不足労働力の確保、消費の面ではパーニュという実用性を伴う奢侈品の安価な購入を協同している。従って女性のトンは、メンバーの生活上の必要を満たすための互助的な組織であり、結果の平等性が志向されているといえる。こうした特徴は固定的なメンバーシップをもつ組織構成にも表れている。

一方で子どものトンの組織のあり方は、互助的というよりも競争的である。競争は共同労働の最中や除名にみられるようにメンバーの間と、報酬額の設定や宴の招待にみられるように同世代の他組織との間の両方においてみられ、徹底されているように見える。年齢組織との関係はK村のトンではみられなかったが、子どものトンの活動を通して村内の世代の紐帯が強化されているといえるだろう。

子どものトンにみられる競争性や条件の平等性といった特徴は、一見市場適応的であるように見える。この点は、共同労働が賃金労働に近い形でなされていることにも表れている。しかし、全体としての活動は経済合理性といった枠組では捉えられない。経済的なインセンティブは生産（労働）の面にはなく宴での消費に一極化しているが、宴の直前で除名されることは十分にあり得るし、宴の購入品はメンバーに厳密に分配されるわけでもないのである。子どものトンの目的性は、必要性の次元にはなく、宴における「蕩尽」に端的に表れているように活動それ自体を楽しむこと、それのみにみだすことができるといえるだろう。こうした特徴は、流動的なメンバーシップをもつ組織構成や、女性のトンが1人1組織であるのに対して、機能的には同等の組織に3つも4つもかけもちをする者がいることにも表れている。

これらのトンはかつてのトンからどのように変化もしくはは連続しているのだろうか。労働の報酬や処罰が現金のみによるようになった点などに変化がみられるものの、そうした変化は表面的なものにすぎないだろう。それよりも、現在より依存度は低いものの植民地期以前からすでに現金を媒体として組織が営まれていた点の方が重要である。また、上述のように子どものトンと女性のトンは対照的な特徴をもつが、トンはもとよりそのどちらも備えていたといえる。厳格な処罰や宴における「蕩尽」がみられた一方で、無償労働等による相互扶助も同時にみられたのである。トンはもとより両義性を帯びた組織であり³⁰⁾、そうした両義性から分化する性向を内包していたと考えられる。また、一般に共同労働の構成単位は個人か家族（家族を代表して個人が参加するもの

も含む)かの別があるが、トンは「リネージの生産様式」と対置される「協同労働様式」として (Lewis, 1986), 個人を単位としていた。これらのトンに先在する特性が、子どもと女性が家族内労働の外でそれぞれの目的性に沿った形でトンを模倣, 分化することを可能にした。その結果として, 同じ「トン」でありながら対照的ともいえる特徴の違いをもつ現在の2つのトンができたのである。経済自由化を起点とする市場経済化は, トンを解体したのでもなければ市場原理により組織のあり方を根本から変化させたのでもなく, かつてからの活動の媒体である現金を量的に増加させたことで, それ以前から少しずつ進行していたトンの分化を加速させたといえる。

共同労働に関する分析の主眼は, これまでどちらかという現象そのものの論理を追及することよりも, 家族の生産性にいかに寄与するかを評価することにあつたといえる。後者には, そうした評価をもとに共同労働が農村階層化にどのような影響を与えるかといったより上位の評価も含まれる。それ故に, しばしば共同労働と賃金労働は家族内労働の欠如を補う二次的な労働として並置され, それらにかかる費用の比較がなされてきた (Kevane, 1994; Saul, 1983 など)。こうした分析は確かに重要だが, 現象そのものの理解を抜きになされた場合には的外れなものになってしまう可能性があること, またそもそもそうした分析視角からは捉えきれない現象があることも確かだろう。本論で検討した子どものトンの事例はこのことを示している。労働の依頼者である生産者=大人の側からみればこうした分析視角は有効であるかもしれない。しかし, 労働を行う当の子どもにとってトンの共同労働は, 年長者からの強制力の下でなされる家族内労働とは異なる次元においてなされている。また, トンの共同労働と個人雇いの賃金労働を費用 (報酬額) の面で比較することは, 一応可能ではあるが (第3節, 表3を参照), 個人の利益を目的とする賃金労働とは異なる論理でトンが営まれている以上, そうした比較はあまり意味をなさないといえるだろう。

アフリカの多くの農村社会において通例子どもは親のために働くものとされ (Berry, 1989: 42), 自律的な経済主体としてはみなされてこなかった。児童労働の文脈においても, 農村の子どもは「それほど搾取的でもなければ危険なものでもなく, 職業上の訓練ないし家計のための労働力」(Bass, 2004: 8-9)とされている。しかし, 本論でみたように, 市場経済化等による社会経済変化によって, 家族内労働から離れた場において子どもの経済活動が活発化している場合もある。そうした現象は, 生産者=大人の視点ないし家族内労働の観点から評価されるだけでなく, それ自体追及されるべきものとして, 分

析を行う必要があろう。

謝辞

本論のための現地調査は, 日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費), 笹川科学研究助成, 大学院教育改革支援プログラム「研究と実務を架橋するフィールドスクール」によって可能になった。また, 本論の執筆にあたっては, 京都大学の高田明准教授, 慶應義塾大学の佐川徹助教ならびに査読者の方々から貴重なコメントをいただいた。心より感謝申し上げます。

注

- 1) マリンケとバンバラは言語や社会構造の点で非常に近い民族集団である。
- 2) 共同労働の古典的な分類には, 「労働交換 (exchange labour)」と「祝宴的な労働 (festive labour)」の2種類がある (Moore, 1975)。前者は固定的なメンバーシップをもち, 互酬性に基づき順番にメンバーの畑を耕す。後者は「ビア・パーティー」が典型であるが, アドホックにメンバーが集められ, 共同労働の最中か後に祝宴的な消費が行われる。互酬性の欠如する後者は富者にとって有利であり, 資本蓄積を招きやすいとされる (Swindell, 1985: 133-134)。しかし, この分類はあくまで理念上のものであるといえ, 労働交換においても祝宴の要素が入るなど実際には両者の特徴が混在している場合が多い (Geschiere, 1995; McAllister, 2004)。
- 3) Lewis (1986: 71-74) は, Meillassoux (1964) や Terray (1972) らによって記されたグロ族の村落を単位として組織される「クララ *klala*」という共同労働組織と対比する形でトンについて論じている。グロ族においてもクララは「リネージの生産様式」に対する「協同労働様式」を構成していたとされる。
- 4) ルイスの調査村においてトンの最年長者は33歳であった (Lewis, 1986: 72)。一方で, 最年少者の年齢に関する記述はないが, レイノーらと同じく年齢組をトンの組織化の基準としていることやトンの成員が直面する問題として「移民」や「結婚」を扱っていることなどから, 最年少者の年齢はレイノーらが記した15歳を大きく下回ることはないと推測する。従って, ルイスのいう「若者 (youth)」と本論の第2節で用いる「若者」は概ね一致すると考えてよい。本論第2節で用いる若者の定義は注5を参照。
- 5) 本論では, 「子どものトン *denmisen ton*」における「子ども *denmisen*」を30歳未満の未婚者と便宜的に定義する。調査村において「子ども *denmisen*」は相対的かつ文脈依存的な概念であるので, 20代後半の者であっても実際にそう呼ばれる。ただし, 歴史的な変遷を扱う第2節では, 15歳未満の者によるトンの組織化という近年の新たな動きを検討するため, 15歳未満の者を「子供」, 15歳以上30歳未満の者を「若者」と区別して記述する。
- 6) 本論に関する調査は, 2009年7~9月, 2010年5~9月, 2011年10月~2012年3月に行った。なお, 事例のケラバ

- ラトンには筆者も入会しており、できる限り活動に参加した。
- 7) トンの共同労働や個人雇いの賃金労働においてある者は親族の田畑で働くことがある。そうした労働が「家族内労働」なのか「家族外労働」なのかは、その者が「何者」としてその場に参与しているのか（「息子」などの親族としてなのか、「トンの成員」としてなのかなど）によるといえる。こうしたその都度の相互行為により可変的な個人の成員性を考慮することは本論の射程を超える。そのため、本論ではトンの共同労働と個人雇いの賃金労働を一律に「家族外労働」とする。
 - 8) K 村の年齢組は 1982 年に結成された「ライオン組 *Jara-si*」以来新たに結成されていない。
 - 9) 1960 年の K 村の人口 1287 人のうち実に 59% がアイダラ・クランの者で占められていた (Leynaud et Cisse, 1978: 449)。
 - 10) ジャバテとアイダラが入村する以前は、K 村はカマラ、コナテ、ジャワラのみが住む小村であったが、移住後は人口が倍増した。具体的には、入村前である 1904 年の 390 人から入村後である 1924 年の 1004 人に人口が推移している (Jansen, 1998: 274)。
 - 11) モリラのアイダラ姓の男性 (72 歳) によると、当時ジェリラの人びとはいつもモリラの人びとにお金を要求してきていた。そのことに怒ったモリラの人びとは、それまでのトンをやめて自分たちのトンを新しく組織したという。
 - 12) 子どものトンのことを指す「トンディン (小さなトン) *tonden*」に対して、4 地区を代表するトンは「トンバ (大きなトン) *tonba*」と呼ばれるようになった。「地区の名前 + トンバ」という呼称は現在でもみられ (表 2)、地区の代表性は全く失われたわけではない。しかし、トンバとトンディンは同様に「トン」とも「子どものトン」とも呼ばれる。実際、両者は同じ内容の活動をしており、組織構成も成員数の多少を除いて違いはみられない。そのため、本論では両者を区別せず「子どものトン」として扱う。
 - 13) 1990 年代以降の住民組織の増加は、しばしば 1992 年の「民主化」による集会・結社の自由や 1999 年の「地方分権化」による末端の行政体における住民組織登録の開始が影響しているとされる (赤坂, 2007; Wing, 2008)。しかし K 村のトンは、「民主化」以前に禁止されていたということも、「地方分権化」後に行政登録されたということもないので、こうした影響はほとんどないものと考えられる。
 - 14) 2010 年は 1 ユーロ ≒ 656F。
 - 15) K 村では乾季に金鉱へ出稼ぎに行く者が多く、2000 年代後半以降の国際的な金価格の上昇も現金収入の増加に影響している可能性がある。
 - 16) 1990 年代前半にバンバラの村で調査を行った Wooten (2009: 99) も、トンなどの共同労働がこの時期から増えていることを村の年長者から聞き取っている。
 - 17) バンバラの村で調査を行った Polak (2012) も、5 歳と 7 歳の少年が親の仕事にしきりについて行きたがる様子や、親との作事中に若者の共同労働に特徴的な奇声を模倣している様子を報告している。
 - 18) 組織内部にみられる分化の要因については 4 節で検討する。
 - 19) 日干しレンガ作りとラッカセイの殻むきは歩合制である。日干しレンガは大量に作りおきをしておいて、1 個 10F のレンガを数百～千個単位で売却する。事前に依頼を受けていることもあるが、その場合も前金などは発生せず、上記と同額で売られる。
 - 20) ケラバラトンの平均年齢は約 12 歳。2010 年時の成員数は 30 人でうち女性が 10 人、2011 年時の成員数は 47 人でうち女性が 12 人である。
 - 21) 近年、(未婚) 女性だけで子どものトンを組織する動きがみられる。そこでの共同労働の内容は基本的に女性のトンのものと同じである。従って、今後女性だけで構成される子どものトンの数が増えた場合、女性のトンとの間に競争が生じてくる可能性がある。
 - 22) 女性のトンでは共同労働を実施する回数や順番が決まっていなくて成員の間に労働回数の不均衡が起こりうるが、報酬を支払うことで調整することができる。
 - 23) 他の理由は、3 人がけんか、2 人が村外への引越し、2 人が活動の拒否、1 人が不明である。
 - 24) このことから、組織からの排除は永続的なものではなく、常に包摂の可能性を含んだものとなっている。
 - 25) その他の資金使途には、小宴の開催のためのお茶代とラジカセのレンタル代の支払い、成員の結婚式や葬式ないし病気の際の現金の贈与などがあるが、いずれも数百 F ～ 2000F ほどで少額である。これらは年に 1 度あるかないかであり、資金は基本的に宴で消費される。
 - 26) 筆者は K トンに 2009 年から属しているが、宴はこの年に初めて参加した。雨季の共同労働に参加していないこともあり、筆者は宴の準備金として 10000F を K トンに贈った。
 - 27) 通常、労働報酬の総額は布代の総額に満たないので、成員らは不足分を分担金により補っている。なお、一般的に女性のトンの資金総額は子どものトンのそれよりも少ない。
 - 28) こうした経験の共有を時間的な持続の中で捉えたとそれまでの活動も宴のためだけになされているとはいえなくなる。つまり、事例では結局フリーライダーを認めていることになるが、毎年のようにこうした経験が共有されているにもかかわらず組織の秩序が維持されていることを考えると、宴以外の活動もそうした目的性のみに還元されるべきではない。
 - 29) ただし、①集団そのものの持続や、②同世代の者や家族などからの威信獲得という面を目的性として考えることはできるかもしれない。①は共同体への帰属からメンバーシップが固定的であったかつてのトンでは顕著であっただろうが、メンバーシップが流動的で、同じ組織であっても毎年名簿を新たにして組織を「組み直す」様子がみられる現在のトンでは弱くなっていると考えられる。②について、特に同世代の他のトンとの競争という側面は、トンが増加していく中で強化されているといえるかもしれない。
 - 30) こうした両義性は、入退会は任意であった一方で共同体の強制力も働いていた点や、組織内部に役割分化がみられた一方で平等性も志向されていた点などにもみられる。

参考文献

赤坂賢 (2007)『西アフリカにおける援助活動による住民組織化へのインパクトに関する研究』平成17年度～18年度科学研究

- 費補助金研究成果報告書.
- Bass, E. Loretta (2004) *Child Labor in Sub-Saharan Africa*, Boulder, Lynne Rienner Publishers.
- Becker, Laurence C. (1996) "Access to Labor in Rural Mali", *Human Organization* 55(3): 279-288.
- Berry, Sara (1989) "Social Institutions and Access to Resources", *Africa* 59(1): 41-55.
- Berry, Sara (1993) *No condition is Permanent: The Social Dynamics of Agrarian Change in Sub-Saharan Africa*, Madison, University of Wisconsin Press.
- Englund, Harri (1999) "The Self in Self-Interest: Land, Labour and Temporalities in Malawi's Agrarian Change", *Africa* 69(1): 139-159.
- Geschiere, Peter (1995) "Working Groups or Wage Labour? Cash-crops, Reciprocity and Money among the Maka of Southeastern Cameroon", *Development and Change* 26(3): 503-523.
- Jansen, Jan (1998) "Hot Issues: The 1997 Kamabolon Ceremony in Kangaba (Mali)", *International Journal of African Historical Studies* 31(2): 253-278.
- Jansen, Jan (2008) "From Guild to Rotary: Hunters' Associations and Mali's Search for a Civil Society", *International Review of Social History* 53: 249-270.
- Kevane, Michael (1994) "Village Labor Markets in Sheikan District, Sudan", *World Development* 22(6): 839-857.
- Koenig, Dolores, Tiéman Diarra & Moussa Sow (1998) *Innovation and Individuality in African Development: Changing Production Strategies in Rural Mali*, Ann Arbor, University of Michigan Press.
- 近藤史 (2011) 『タンザニア南部高地における在来農業の創造的展開と互助労働システム—谷地耕作と造林焼畑をめぐって』松香堂書店.
- Lewis, John van Dusen (1978) "Small Farmer Credit and the Village Production Unit in Rural Mali", *African Studies Review* 21(3): 29-48.
- Lewis, John van Dusen (1986) "Village-Level Constraints on the Exodus from Rural Mali", in Beverly Lindsay (ed.), *African Migration and National Development*, University Park, Pennsylvania State University Press, pp. 64-81.
- Leynaud, Émile (1966) "Fraternités d'Âge et Sociétés de Culture dans la Haute-Vallée du Niger", *Cahiers d'études africaines* 6(21): 41-68.
- Leynaud, Émile et Youssouf Cisse (1978) *Paysans Malinké du Haut Niger*, Bamako, Edition Imprimerie Populaire du Mali.
- McAllister, Patrick (2004) "Labor and Beer in the Transkei, South Africa: Xhosa Work Parties in Historical and Contemporary Perspective", *Human Organization* 63(1): 100-111.
- Meillassoux, Claude (1964) *Anthropologie Economique des Gouro de Côte d'Ivoire*, Paris, Mouton.
- Meillassoux, Claude (1968) *Urbanization of an African Community: Voluntary Associations in Bamako*, Seattle and London, University of Washington Press.
- 三浦敦 (2009) 「構造調整プログラムの社会的側面—フィリピンとセネガルの比較」『埼玉大学紀要 (教養学部)』45(1): 167-191.
- Moore, M. P. (1975) "Cooperative Labour in Peasant Agriculture", *Journal of Peasant Studies* 2(3): 270-291.
- Polak, Barbara (2012) "Peasants in the Making: Bamana Children at Work", in Gerd Spittler & Michael Bourdillon (eds.), *African Children at Work: Working and Learning in Growing Up for Life*, Berlin, LIT Verlag, pp. 87-112.
- Saul, Mahir (1983) "Work Parties, Wages, and Accumulation in a Voltaic village", *American Ethnologist* 10(1): 77-96.
- Shiraishi, Soichiro (2006) "From Beer to Money: Labor Exchange and Commercialization in Eastern Uganda", *African Studies Quarterly* 9(1&2): 39-53.
- Soares, Benjamin F. (2010) "'Rasta' Sufis and Muslim Youth Culture in Mali", in Linda Herrera & Asef Bayat (eds.), *Being Young and Muslim: New Cultural Politics in Global South and North*, Oxford, Oxford University Press, pp. 241-257.
- Steiner, Béatrice (2011) *Cybercafés de Bamako: Les Usages de l'Internet au Prisme de la Paranté et des Classes d'Âge*, Paris, Karthala.
- 末原達郎 (1990) 『赤道アフリカの食糧生産』同朋舎出版.
- Swindell, Ken (1985) *Farm Labour (African Society Today)*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Terray, Emmanuel (1972) *Marxism and "Primitive" Societies: Two Studies*, New York, Monthly Review Press.
- Wing, Susanna D. (2008) *Constructing Democracy in Transitioning Societies of Africa: Constitutionalism and Deliberation in Mali*, New York, Palgrave Macmillan.
- Wooten, Stephen (2009) *The Art of Livelihood: Creating Expressive Agri-Culture in Rural Mali*, Durham, Carolina Academic Press.
- Worby, Eric (1995) "What Does Agrarian Wage-Labour Signify? Cotton, Commoditisation and Social Form in Gokwe, Zimbabwe", *Journal of Peasant Studies* 23(1): 1-29.

(Summary)**Collective Work Group of Children and Married Women in Rural Mali:
Historical Transition and Comparison of Economic Activities**

Ryosuke IMANAKA

Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

Since the late 1990s, the number of the collective work group called “*ton*” has increased in the rural areas of Southwest Mali. The change is due to the increase in the amount of cash distribution in the village, which was caused by economic liberalization. Although the *ton* has been since the colonial period, the groups which have increased in recent years are newly organized by children and married women respectively. In this paper, “children” is defined as unmarried persons under thirty years of age. In this paper, the historical transition of *tons* is explained. In addition, the characteristics of the economic activities of children’s *tons* are compared with married women’s *tons*. The economic activities of the two groups share the same features in that both do collective work for cash remuneration,

save their wages as an group, and spend all their savings in the festivity. On the other hand, the purposes of both groups in their economic activities are different. Married women’s *tons* seek to fulfill their members’ needs in daily life, while the children’s *tons* focus only on enjoying their activities. These differences in purpose are reflected in the differences in the organizational structure where the membership of one is fixed and the other is fluid. In spite of having such contrastive characteristics, the reason why it is possible to call the two groups by the same name “*ton*” is attributed to the features that the original *ton* had: coexistence of two contrary values, tendency to subdivide into groups, and the formation of group by individual units.